



星月夜顯晦録
四編
五

3
2208
20



門へ遠13 特
2208
巻 20

星月夜頭晦録四篇卷之五

目録

○美盛美兵出陣土屋古郡北条が館と攻破
よりのぎへいあぢんつちやきまややぶらう ちて もあて

鎌倉商民恐怖の図
まぐらりのしやうじんそふ

○幕府西北両門合戦朝比奈恠力惣門と搦崩
むくみ せいやく せうもん せん ちひな けりき ぐらふ せん ちん ぶ

土屋美清古郡保忠北条が館と攻破図
つちや よしよ べん ちゆう べん ちゆう べん ちゆう べん ちゆう べん

朝比奈美秀卿所の御門と推壊図
ちひな よしひで ぎよ ぎゆん けい ぐらふ

星月夜頭晦録卷之五

○美清保忠北条美時と襲入朝比奈勇戦御所を數軍討死

御所放火実朝御御立退和田勢夜軍の図

星月夜頭晦録四編卷之五

義盛美兵出陣土屋古郡北条が館を攻破る

夫行路の難の海はあつて山はゆるぎ人情反逆の間はあつて白泉天が
云ふ。三浦平六兵衛尉美村々。和田一黨の中弟一の親き者も
暫時は心を喪へし。美時子隨ひ美盛が手配悉拵へし。美時厚く
款待態勤に策を問ひ。美村申て云く。美盛横山は申合する旨あり。は
明後日あつてはまを發せし。その中防戦の用意をいふ。いふも出来や。い
このと恐る。先今晚の内込國へ人と馳楮臣と招き御所を守
り。いふ。去る。和田一黨死を抛ての血戦あり。餘程烈き軍あり。い
り。いふ。美時心中大に恐る。先此段申上て用意をいふ。いふ人といふ村を
伴ひ夜中君辺に出で。美盛が反逆決定仕。明後三日御所を襲へんと



三日月のあ。一族三浦茂村及忠を。唯今折へ出ひ横山右馬允合休めて。
 本領より軍勢を催し、さうり出く。大事にかよひゆるる。近國
 の諸士へ廻文をりつて招きあめ。防戦の用意仕くんと申上て。茂時唯
 自分の身をかり煩ふ。即時に奉書と認め早打の使者を近國へ
 一。防禦の方便をきとく。然るに武士鎌倉に在る。あ心あぞ。
 狼唄騒ぐのさ。さうくもき備わく。茂村を頼と万支相談みあふ。
 初又茂盛へ五月二日の朝疾起て盟約の。最早明日に近付くれ。バ
 種くの手配指揮をかよひ在る所へ朝比奈茂秀あ。来て。三浦
 茂村兄弟。昨朝日の夜俄に心変り。御所方へ参り。承る。あさ
 能く相究め。相違ら。と告げ。茂盛心を拵て驚馬歎。昔
 誤り。吾摠。と云て。暫時黙然。子息。向ひ我此度の

計儀成就せざるを。知も。忠茂の為。命を抛。万。一ツの賊臣。とこ
 さんとあひ。今。至。疾。更。の。あ。を。察。を。入。力。の。既。且。ふ
 處。あ。も。天。の。命。あり。兵。法。を。密。と。貴。ぶ。と。あ。を。推。し
 ち。然。も。此。度。の。企。も。正。直。を。り。つ。て。邪。曲。を。村。に。何。を。密。の
 謀。計。を。あ。ん。や。と。かり。ふ。就。て。君。の。御。使。者。も。逆。臣。を。殊。伐。仕。る。の。由
 御。答。及。び。一。族。へ。隔。意。を。計。茂。と。校。む。殊。は。三。浦。茂。村。平。日。不
 快。の。色。あ。る。い。づ。も。親。と。一。族。の。従。弟。を。筆。め。り。り。密。意。を。培。ふ。我
 かり。く。日。頃。の。不。快。の。私。の。支。此。度。の。企。も。国家。の。為。る。れ。彼。三。浦。茂
 時。と。忠。と。茂。と。の。二。ツ。を。并。へ。さ。る。も。あ。つ。と。思。ひ。よ。父。祖。は。男。と
 する。未。練。の。あ。る。い。既。に。事。を。発。する。期。の。を。ん。で。敵。と。あ。る。茶。言。詰。み。絶
 せ。憎。み。奴。原。と。かり。へ。怒。り。堪。む。る。腰。拔。武。士。と。味。方。小。あ。つ。と

て助けのあつて。敵みあつても恐ろしく足ねども。彼者味方の計を
折へば。幾時君命と偽り近国の輩と急を招寄已に御所を隠れ在
べ。あつて容易に討て難うべ。そ我謀の密なるを彼が腰ねけの
魂を見損ぜし。一社の損といふべ。大直の成へるを又先ある所あり。
さるども今に至りて。孔明が言ふ事を謀る人あり。直を
天のありと此上の運を天に任まざる。横山と申合明三言と定むるも
今片時も猶豫あらず。速に事を発まべ。即時一族へ觸つて
子息郎ホも急を用意とあさし。わけるよ。土肥土屋岡寄渋谷の面々
我もくと。幾盛の亭に馳集るその体聊も隠密の幾も。甲冑を
帯。群衆をよめて。諸人よ。軍をよ。ゆるよ。恐ろしく
処は筑後左門尉知重の幾盛が近隣あり。此跡を見て。初日

頃の爪。幾盛を發する。大よか。急ぎ。弟従
具。甲冑を身を固り。廣元朝臣の亭に馳行。あつて。のよ。を訴へ。只今
のふども。計が。と。大息。繼で申せ。も。廣元も。大。周章。袋束。引。番。御。呀
み。参。も。筑。後。知。重。が。訴。の。趣。り。り。上。り。も。君。も。今。更。の。こ。も。有。り。と
思。り。り。と。處。過。急。の。訴。へ。驚。き。入。り。せ。も。ひ。宥。め。り。ん。や。も。う。く。中。評。幾。有
け。り。も。幾。時。さ。の。恐。ろ。し。く。彼。一。族。を。集。り。用。意。す。ま。も。今。日。の。幾。も
て。い。ま。し。横。山。右。馬。允。と。堅。約。せ。り。明。日。と。定。め。ら。る。ま。は。今。日。も
唯。勢。拵。ひ。の。と。あ。り。べ。り。その。間。ま。近。国。の。輩。馳。す。る。べ。り。と。い。ふ。ま。う。く
落。着。し。る。跡。を。幾。村。が。内。意。を。承。り。居。る。ま。は。う。執。權。斯。の。ご。と。く。ま。は。其
餘。の。非。車。狼。も。騒。乱。を。う。り。も。と。り。り。合。ひ。さ。り。防。戦。の。用。意。す。り。これ
今。二。日。夕。方。に。諸。臣。馳。す。る。べ。り。と。幾。村。が。計。伐。よ。る。處。あり。さ。る。ども。廣。元

鎌倉
商民
の
恐怖
の
圖



星月夜四編卷之五

君と勸め奉りて、我盛強ち君に仇仕る我いぢと存ぶまごも手下の諸
士不時の変測アケケリハ君をとりぬ公御臺所より御所を避け
らま当御所より執権と某亦残アてよく相守アケケリと申上る
之ハ廣元原来我盛が逆心アケケリを知る也へ君を服へしむるハ
あつとぞと思慮ある也へり。君も最と思ひ。先母公のみん方右の
御進せしと返事み我身の老衰のて御臺所女性なれば手足を
あつとやせん。依てあつと鶴岡へ退くべし。武將ハ御所ハ在り
近国より馳すの輩覚束なくかりべし。まご我時武將の御傍と
まごよく守護あつとと仰せ越さける也へ君もまごがひひ公の
所ハ鶴岡へ落しかり。君ハ御所止まひける。我時元来君の御傍
と離れての吾身危しとかりぬ公の指圖とまご君の御傍

詰て重くとも。若此時君も御所を閉せり。我時止居程あり。
我盛が本望達し北条家より亡び頼朝卿の孫孫永く大業を失
はまかり。我時君の御傍と離れり。和田が誠忠成り空討死
しけり。鎌倉の正統以絶えり。前表残念多共く。我盛が館
一族追々馳着也へ我盛自身着到を改め大将分の輩々大庭列坐
せり。軍配の下知よかり。先土屋大学ハ我清を大将として一十余人を
北の方より進し西廻りて北条の亭を圍て打破し。又古郡新左門尉保忠と
大将として一十余人ハ西より進し北条の亭を衆破り。直横大路に至
幕府を圍て御所中より馳入我清我秀ホと一所みる。南表大手の方ハ
朝比奈二帛我秀一十余人を従へ正面より。惣門を衆崩し。土屋
古郡と勢を合せり。我時近付討取と弟一とヤ。三方の勢

府内み取詰るゝ死に君定めて東の道より法華堂辺へ退去あるべし。然るに
 義時供奉に疾し其身と遁んとせし。三人の内一人は東の道より出て君を
 救ひ至る時を生捕へし。時宜よりんが殊戮せよ目ざせ処に北条のこゝ在府の
 諸臣防戦とも唯打破て進通し合戦と好むるも夜軍とありてよく
 味方慎で兵と散乱せしむるも互に花と救ひ根よ一人の働さるべし。
 義時人討捕へ早く軍と收じし。後陣は相図の鐘を鳴るは竹時を
 も引退げし申渡し手配既定りけし。五月二日申の上判一時は諸軍を
 押出せ先陣より朝比奈三郎義秀のまゝとありて非輩と彼谷次郎高重
 中山四郎重政門太弟行重ホ一千余人ありて御所をさしと押しよる
 次は土屋大学公義清とありて従ふ非輩は土方五郎政直岡寄与一左門尉実忠
 塩屋三郎惟守ホ一千余人ありて進発も次は古郡新左門尉保忠とあり

従ふ輩は八庭小次郎景兼深澤三郎景家土方太郎遠政ホ一千余人
 都合三備三千余人と先陣とありて後陣は大将和田左衛門尉義盛同
 新左門尉常盛同新兵衛尉朝盛入道実阿弥陀佛同四郎左内尉義直
 同五郎兵衛尉義重同六郎兵衛尉義信同七郎秀盛土肥先次郎左内尉
 惟平梶原刑元朝景同兵衛尉定景同次郎景衡同三郎景盛同七郎
 景氏ホと始りて都て大將分百五十余人その外家子郎従ともは惣勢
 五千余人整とありて押寄る破竹の殺気天を衝馬蹄の土埃四方を掩ふ
 目ざせしと行ぬる鎌倉中の人民もろりの膽を冷し又さる者ハ耳を
 駭かし資財雜具と山林と捨ひ兒女と負て逃るものあり騒動もろと大き
 ろもど在鎌倉の諸臣もかたは周章御所へ走着由形せし止とあり
 比もど己が館を固め又合せありさるゆゑも義盛が軍勢小町大路に至る

北条の亭を修理亮泰時在て此より大に歎息し此乱根々
 々此方のみとて今更ださやもあく君父も御所中又在さうへ
 彼所へ趣き守護せしめあつと家子郎等を引連ゆとて御所へと
 馳到りてや美盛押しを来いよりさそを御所中うねて覚悟といひ
 あり唯今急ぎ発せしむとてかひひとらと放儀の上と下へと駈立在合諸
 士を命じ守めんとする処へ在府の面を追く馳参るよと先西の門へ執
 権の弟北条武敏守時房北条修理亮泰時相模次郎朝時叔父甥三
 人八百余騎めて固り西北の方を波多野中勢並忠綱川崎男忠時
 三浦千六兵衛尉美村川九郎左門尉向義兄弟一十余人とめて相守
 南の方へ筑後六郎知直潮田三郎美末新野左近将所景直一千二百
 余人めて相守りて手配をせれども俄に備全くも御所あり大江

廣元北条美時とらめ伊賀守親光足利上總三郎美氏武田信光
 浅利市美遠二荒山の別當法眼并覚裕姓遠方の輩二千余人めて
 君と守護ししり時美時敵の勢は破竹のぶくとて大に恐怖し
 美氏をよひて申しける西方の警固無勢を甚むる一足下彼所
 へ行て時房泰時等より力を併せせぎも左より西門より破る
 一とりてとみぞ承しつりいそ足利三郎義氏家子郎従三百余人
 と引卒し急ぎ西方へを向ふ此時和田が先陣朝比奈土屋古郡の三將
 三方に分まかりよするその中土屋美清幕府の北よりとて壹番
 北条の亭へ押詰め鯨波とらとけり矢とらとる雨のぶく一時小
 衆破らんとして西方より古郡保忠北条が館の西より短兵急攻
 よせかみく雨の声をあひせ箭と発するよかよびぞ自身真先立て乱入

ありて館と守る北条が郎等藍澤藤五郎河藤九郎服部次郎等
 僅二百計の士卒にて命をうらみ防ぎて。奇手大勢うらみ土屋
 古郡が勇猛とて両方より攻めしめり。ゆがて依之る門の守りと損
 引入るるも奇手西北より乱れ入るるといひ。切て廻り坊主とてく
 袈裟まで憎む。いし。時み仕へて非道と助る奴原一人も餘を
 真先立て働く。いへ。従ふ者も少くも猶豫せざ。戦ひうら
 挑に北条の士卒遁歩も叶り。大半討ちける。藍沢兄弟服部等所詮
 のまね命一人ありとも討て死さんと木刀真尹さ。簪頭。奇手の中へ切
 て入る。古郡保忠とて。い。時が郎ホ。優。拳動相手。不足なれ
 ども。健気。免。討捨。い。馬と駈立。藍沢兄弟左右より受。い
 一。三合。い。兄弟藤五郎と馬より下。斬。藤九郎肝

と冷。出生。保忠追馳。一刀。切殺。恐。刃向ふ者。服部次郎。

土屋清。敵兵一人。在。手始。勝。取行。聊息。休け。

朝比奈。力。幕府。惣門。搦崩。実朝。法華堂。立退。

くて土屋古郎の兩將以前のごとく勢を三手より。定めのごとく西止。別。

幕府とて。襲。古郎左。門。大庭。小次郎。深沢。三郎。の一千余人。

西門。押。北条。時房。泰。朝。時。三。旗。立。在。

保忠。親族。

悉討。取。真。真。斬。武藏。守。時。房。一。陣。進。我。家。の

存亡。此。一。拳。分。外。の。勇。防。保。忠。古。今。の。剛。勇。右

み。衝。左。當。切。回。勢。泰。山。の。崩。刃。向。者。家。

是。時。房。備。乱。此。手。既。破。人。泰。時。屈。竟。の。射。手。と



つらやいりまきやま
土屋美清古郡保忠
あきつりうらちせりあつ
北条が館を攻破圖

勝て百人をうろ左右立古郡が勢の横合う。篠と乱とぞく射立を奉時
 自太刀と振て先登進を攻戦也。時房をみ力をめて色を直し。とぞ専
 途と防ぎける。されども保忠無双の暴者馬上の達者早業手練の豪傑
 敵の乱箭を幸ともせず馬と飛し就立駈して近付めと切てかじ
 千変万化して戦へ相もご大庭小次郎景兼深沢三郎景家土方太
 遠政ホ諸勢と驅立保忠よ力とぞ互に知ら中うれば。耻と知りて
 重し。一足の引くと戦ひるや。又も北条家負色もろく危くもる處へ
 足利三郎茂氏母北条時政の女新牛の兵と引具し馳来て味方を助け入
 替て防ぎる。時房奉時やび備を立直し。四人の大將四手も別
 必死よめてぞ戦ふ。寄手ハ元来今日と限りてかめ切らるるれ。身
 身心労と腕も撓むと人ども退くあり。微塵もろく駈抜しせらるる戦

やどより果てし軍も入る。又北条が館の寄手土屋大学以
 茂清岡寄左門尉実忠土方高政直鹽屋三郎惟守ホ一千余人
 北の門へか寄ける。此口の防禦を將ら。波彦野中勢丞忠綱ハ無
 双の勇士にて火水の中も顧む。敵とぞバ道ヤととまき猛勇なと。バ
 寄手いもど近付らる。此方より馳出政所の前と過寄手の先
 勢塩屋が兵を遮支矢合せ。かよぞ。真一文字を切てからし。三浦
 三浦平六兵衛尉村々。此度返忠の御所方と。他より魁合戦
 ともいふ人と思ひ居り。波彦野忠綱先登進し。とぞ。茂村彼
 より先へ馳ねけん。と備と乱し忠綱が股より馳通。塩屋が兵と討
 かる。勢も衆て衝入ける。の塩屋あやう。烈しく兩人は馳立れ。
 備崩とさんぐの体も。半町をうり引退くと。波彦野三浦勝も衆て

味方と下知し。差急し打破んとせしけり。寄手の大将土屋茂清先
 勢乱れしを以て大に怒り何奴も我軍を支るがや土屋大守は
 茂清を知りしを以て怨敵北条を組する者ども。一と蹴殺し後代の
 見懲りしとせんと馬を踊せ四尺余の大太刀を引抜きて未波野三浦
 が兵の中へ會釈むく衝て入馬武者歩卒のまゝひらき前後左右に
 切てやるるに忽敵兵十四五人眼下に斬倒し。猛威をうけて戦形勢日
 未名あわ土屋茂清推あしぬ者あはれ御所方の兵駭き恐舌と
 巻て屍を以て土屋の囚を衆て巴のどく又ハ十字字に切て回さば敵兵ら
 と靡き道とひくかハ十分は備と突崩し。直に御所へ至ると馳
 時波野忠綱を以て勇しと茂清の根廻る日來ハ入塊の傍輩
 られども御所に向て箭を突ると見のどくを以てやわらん返せ土屋

戻せ茂清波野忠綱を以て在曠る太刀打して渚軍の眼とせよとせよ
 ろりと大音を呼り馬を飛して追馳る茂清馬を引返し。我輩國家の
 為に逆賊を誅せんと欲するは汝の源家累代忠臣の子孫にてあるも君
 家の血脈を受るる先祖の忠功を以て君の怨敵北条を扶け我々が
 美兵を妨げんとせらるる行支るや天誅を招く賊臣争り我真忠の母に向
 るべきを首取て以せんと鍰元を血に染る大太刀を打ち切てくる。
 忠綱此祠と空し心や徹しけり勇氣撓んで勢多し渚人のするや止
 とどろむ。二打三打戦ひしが太刀筋乱れ負色あはれんへたるまで忠綱が
 嫡子次郎忠時家子郎平を引具し。父を救ひんと横合より馳はくる。
 土屋が方ものをもてかゝり大勢馳来り忠時と防ぎ戦ひし。バ
 双方再入せられ茂清忠綱兩人もかゝり中を隔てし互は物もなれ。

乱軍とありけし、土屋古郡西と北と西門の合戦、救利なきは、いづれも勝負
と決せしむる名を惜み、茂と重し。命を輕し戦ふべし。夫呼鯨波の聲
山河の震ふなり。同時に南表大手の方より朝比奈三郎、茂秀、波谷
次郎、高重、中山、四郎、重政、四三郎、行重、一千余人あり。寄るに御所
方より潮田三郎、茂末、新野左近將監、景直、筑後六郎、知直、一千二百の兵と
りて固り居ける。敵近よりきて、此方より備をなし、出づ戦ひんと。潮
田三郎、真先、みよとぞ。楮卒と下知し待みたり。朝比奈、茂秀、茂末を
我、此手の大将あり。先登して敵を破るべし。各々備を乱さず、跡より進
むる道と披くを快く通すべし。楮勢よひ捨て、唯一騎馳出せ。茂秀
此度、新に鍛造せる處の鉄楯、棒長廿壹丈余あり。重廿六十斤、手元と
丸く先を四角あり。是をりて敲くは、鉄石も微塵とす。件の棒と右

二、梶、鶴、敵、合、近、く、あ、つ、と、れ、馬、と、飛、せ、駈、入、り、手、馬、手、と、打、て、す、り、り、行、く、以、
て、さ、る、へ、き、或、は、馬、人、と、り、の、擲、居、あ、る、い、と、境、を、粉、み、碎、く、と、暫、時、に、死、せ、
る、り、の、五、十、余、人、潮、田、が、備、一、時、よ、と、れ、茂、秀、唯、一、人、に、馳、立、り、と、さ、る、と、
あ、り、け、る、よ、と、潮、田、三、郎、無、念、り、か、り、ひ、弓、と、矢、を、番、ひ、茂、秀、を、射、と、り、ん、
と、馬、を、よ、せ、敵、近、く、あ、り、け、し、へ、認、ひ、と、さ、り、切、て、突、つ、弦、音、を、受、て、茂、秀、
早く、身、を、側、め、け、る、也、へ、此、矢、中、に、潮、田、三、郎、の、矢、を、射、ん、と、番、ひ、茂、秀、怒、り、
逸、奔、り、馬、を、飛、せ、鉄、棒、を、打、つ、微、塵、も、あ、る、と、う、つ、て、り、る。潮、田、三、郎、此、
勢、よ、か、そ、れ、番、ひ、と、う、あ、り、膏、工、と、あ、ら、げ、弓、矢、を、取、か、と、り、馬、を、引、く、へ、逃、
出、せ、茂、秀、い、よ、く、悲、し、道、を、ま、と、り、と、か、ひ、行、處、に、新、野、左、近、將、監、と、合、
より、馳、出、入、力、を、拔、持、茂、秀、を、討、ん、と、ぞ、茂、秀、と、り、て、何、者、あ、ら、ん、と、
我、馬、前、と、さ、り、げ、ん、と、さ、る、也、志、々、神、妙、ら、ん、己、い、と、と、り、付、り、茂、秀、



朝比奈義秀の御所の門を壊すの圖



鼻の真中み両手をうけ惣身のかを腕と腰と入まで大喝一声雷の
ぶら、呼んで一ト押がけつる両方の柱の根をわらうとこまむ良
惣門働きて倒るるぞぞえけは守兵木駭さつとく大勢あつ重う
押をといあけまとも面をかど竭一破とありと押る也へ表のうへ
麻痺控ぐと秀秀ゆらうと囚み乗て再金剛力を出し曳やくのうけ声
あつ押戻を三度四五度くのごく押合けり忽大地堀崩れ垣も柱も
震出し家根の瓦どろろとあつとて秀秀爰をそ二世の力業と
見せんぞめのと吼猛て押けり終り内へ押倒しけは門内の軍兵
一時みまると喚くとまへが救百拳て在り兵卒辱み打と即死者者
十余人くくく匍匐出るも手足を傷ひ疵を蒙りめの用も立
たりけり。其余々大に驚馬怖らうくみ逃失門内は遮る者一人もあつ

一が秀秀味方と摩り馬引よせてひらりと乗鉄棒引擔一番のり
込けは跡は續て波屋中山の輩胡比奈が振廻凡人の所為はわつてと
感称し。かあしく打入るよぞ大手の惣門破れ和田が軍兵幕府は押
入りと喧へし北の守の三浦波野大まかどろろ今御所中覺束は
君と守護せんと。まろく引連退さけりよらて土屋秀清惣勢を加へて
北の方より乗る西方の守護ホも防戦叶はざ北条時房恭時胡時足
利義氏堵ぐも西門を弃て御所中へ引退くまよらて古郡保忠ホ西
門より乱入兼ての相図るは三方の味方一所集り。秀秀清保忠
三将真先まよらんで御所の表門より。浩る胡比奈三郎土屋古郡に向ひ
北辺ホ西の方の道筋より裏み廻り。秀時が逃出ると村取へ我一手
どらつて諸臣と支へ戦ふへ。定めて秀時君まよらひ逃出へとあつ

うく見定めて、兼忽あつて我きと彼と追ひて謀わりと申ける也へ、
清保忠らるるゆとと両方へも是御所の後へ廻らんとき、此時御所
君合戦のやうそつとと察し、あつて三方の門破と敵兵乱と入ると
告ぐ、北条氏時大に恐る片時もせず、鶴岡まで遁れ出させ、
へと君を勧めたり。巴口命と全ふらんとき、あつて君は御心
夫せと猶豫あり、あつて是は朝比奈茂秀士率と下知し、御所の西表
は火とつけさせ、程は西凡烈く餘煙御所中へ覆ひ、今へ道
とて供奉と命せられ、法華堂まで退用をあらんと仰ありけるも、
時一番は身拵へして早く出せり、一人周章狼狽あり、君は先立
御所中と出、大膳大夫廣元朝臣伊賀守親光亦、実朝卿と守護
あり、裏門より遁れ出御所の炎と燃るとうへり、法華堂

また落のびんと急ぎける

茂清保忠北条氏時と襲へ、朝比奈勇戦御所方救輩討死
実朝卿御所と閑避あり、甲斐源氏武田、笠原の輩と、北条
一家足利氏、三浦波多野の面く踏止り、敵を防ぎ、戦はん、土屋
古郡の両将、裏道より進むると、筑後左門尉知重、六郎
知直、葛西六郎重安、近江守頼重、水道筋を備へて支けり、土屋古郡
勇威を、打破て通し、既君の落を、所より、大音を呼べり、
和田左門尉茂盛、国家の逆賊君の怨敵北条氏時と討んが、為一族
と催し、推参仕り、君は對し、不忠と存せざれば、不礼の義は、
遠く、時と出、幕府と襲ひ、幕府と襲ひ、幕府と襲ひ、幕府と襲ひ、
逆賊御所中へ在て、外へ出、止とせ、和田が忠義の

君より知し召し出さるる今更らうし上ふかぶらぬ時と申すあり
 りの早速軍と收め静謐なごころ申すべしと申すありと申すあり
 取囲まんとす。我時と先立て御所と逃出た法華堂と趣きこころ
 居合さす。廣元かどうも進んで汝無礼なごころれ君火災と避めん
 とす。御所と退去ありしとす。我時と御側ま在り早やと不忠
 の罪と蒙るごころと申されし。我清保忠直くとす。守護の輩と一
 改めし。我時と居ざりし。兩人声と揃へ
 賊臣何国へ逃ゆを存し。廣元と答られけり
 白へ。我免と蒙り。我清保忠直と捨て。我清保忠直と引具し退きけり。我清思案し。定て鶴岡へ逃し。追駈討取んと。操りて馳行鶴岡の門前までけり。我

昨日より尼公と申す。君の御臺所あり。守護の武士五百余
 門前を固め居ける。土屋古郡二千もの兵と引馬煙と立て寄来り。守
 護の者共驚き恐と戦はる。先んぐと逃走する者ども。寄来り。百
 人ぐり。踏し。門と守居ると。我清亦近く。寄我時と。早くと
 早く門と開き案内せよ。左より汝片を。珠せんと呼し。番
 兵共震ひ。此所を尼公御臺所。二方昨日より。出入と免さ。定て法華堂へ
 護仕枕権の爰に居る。其外昨日より一人も出入と免さ。定て法華堂へ
 趣き。尼公爰に。我時と頼と隠居も。が。吟味
 と号し。近隣の御家臣を催促仕る。処結城小山宇都宮佐木
 の輩

牧千人と引て法華堂と守護し猶味方と村人と手勢と引分未だ
 後を塞ぐぬらち早く退き去るとりうそぞ。我清保忠意と切我
 輩最前速又法華堂へ押よせよ。我時と擒よせんりのを思慮の足
 さうこそ残念なる。あう。我秀と一手あう。諸臣ホと追捲君よとふて
 是非我時と清とべし。二人馬と並べて引返せ処よ佐々木五郎我潔
 結城七郎左衛門尉朝光ホ北条が差図めて君命と守。和田が兵と防ん
 たり。御所へ馳赤る道めて。ちう。古郡土屋の軍勢よ出會互ふ夫と
 突し合戦よあふ。此時既日暮夜よ入けよ。炬火の光よ打合るる
 土屋我清敵將とまよ。結城朝光佐々木我潔ホあう。大音上るふ
 来て我くと防拒む。結城佐々木の人くみま。余人多格別。刃ホハ
 右幕下草創の臣とて。君家のとれと思つぞ。賊臣北条と助我輩の

忠義の兵と村人とのさう。の余奇怪う。我時が横道。刃ホと
 正道とかりや。合戦と時の運よるべし。我く元来我時と村はどんば
 死して泉下の君よ仕人覚悟る。死よとも悔さる。泉下よかいても耻る
 とる。刃ホハ。我くが為よ命と落さ。何の面目あつて。源家累代
 の尊灵よ見へなるや。一時の富貴よ末代不忠の名と貽さん。大大夫の本
 意よあ。とと呼り。結城佐々木と。道理よ責。赤面
 び戦ん。我勢う。互は顔と見合。御所の軍心許み。とぞ救ひ申え
 と早。繰りよ退きけり。結城七郎左衛門尉元来和田と入魂あ。幼少
 より万夏世結よあう。恩もあり。城よ此度の企忠。我より。発る。とある
 と。と。戦ふ。本意。と。思ひ。君命。非。かり。い。が。あ。
 土屋が一言胸よ退去せ。又佐々木五郎も我盛が忠。我と。其。上

星月夜四續卷之五

御所放火
美朝卿
即立退
和田勢夜
軍之図



先年佐々木三郎盛綱が嫡子小太郎信実二藤祐経がらみ君の怒と
 家も信實と為ゆ一藤渡さへも頼朝卿の命ありと盛密
 信実と抱舞祐経は屈伏させ君前と申し直させけるに再答さ
 信実命と命ふるとゆる。若此時盛が計ひるん信実ハ二藤が
 為害せしと盛綱も佐々木一家の耻辱とせんと盛無吏
 と扱ひつらた佐々木の氏族厚情と感。和田が更ま於何よりぞ
 救つんと思居らう。此度の防戦曾て願ふとらみあぞ。五
 毛潔の胡光が退くと倅一所成て川行ける土屋古郡も日頃朋友の
 情とかりひ追討せんとも合も。敵味方とらみ名のとて佐々木結
 城が跡より静な備と立直一秀が手へ急さける。此時君ハ法華堂
 へ入らせありしが守護の輩とらみと武士あらみ結城佐々木小山

宇都宮の面々追ひく馳来らば女ハ安堵あり。あとの人も。秀時
 聊も心を安まると能はざ。若土屋古郡の者共此所へか来んくと恐れ
 慄さると支防ぐが。結城佐々木とほら。鶴岡より川返人道
 と塞ぎ戦つら。御所の合戦急め。朝比奈秀が佐々木味方
 の兵討ら者救とあら。此も結城佐々木も御所の危急と救ひ
 へ来り。と昔来らむ。猶もか。魂も身も漆の心を苦めける。扱又
 朝比奈三郎秀が御所の表門に在て支る族と馳立北条が士卒と始
 御所の川家臣ハの勢と悉く村破り敢て敵する者あり。四方
 八面馳廻り鉄棒と振ら。難立ち。当る者ハ擲居ら。打殺さ。と
 秀一人の向ふ処。道を閉と。通さ。勝み。衆て士卒を。劬あり
 戦ふ処。御所方。葛貫三郎盛重。小文治高直。向ひ。扱ける

五十嵐馳来て、戈秀が鎧み手とりけんとなるやへ、戈秀鎧の鼻あてらるゝと蹴らるゝ。五十嵐は抜たる太刀を片手、持馬より下り蹴落され、勿心絶へ死せり。けり、戈秀頓て葛貫を引よせ、己嵐のどき分際をせまらんで、虎の鬚を撫んとす。速み首と捻功捨へけし、もつゝ劣る微力者と罪作み何りせん。生かす生かすと云ひまよ大の丈夫を目より高くさし揚、弓杖二天をり、投つけらるゝ。何らあつて、三郎盛重五郎石も當て碎る。二言ものりぞ死し、けり。時又、所方より一手の勢馳来り、戈秀と知らるゝ。みや四方より追取巻中、おの礼拝蓮衆といふ法師武者長刀より振真先に進み道せよと打てらるゝ。戈秀もろて、蠅虫の輩一騎打ひ面倒ありと、鉄棒追取飛らるゝ。先みせとて、蓮衆を唯一打み敲らるゝ。群々中へ馳入て、四角八方を雜廻し、三十余人と矢筈に討殺し、死人

山と筑よりける。残兵膽を冷し、吾人間にわらせと恐し、入てらんぐみ敗走せし。再び近より敵あり。此間夜に入り、敵も味方も分がた。乱軍あるも、も戈秀が通る処、その烈さを恐し、支る者もあらうけし。又高井三郎兵衛尉重茂といふ者あり、是々和田、戈盛が弟、和田小次郎、戈茂が子、又て正しく、戈盛が甥なり。此度伯父、戈盛が企て、あつて、君と射ちらるゝ。逆臣と心を夫し、始り一味せと、知れらるゝ。居たりしが、今日一族等御所を襲ひ、なると、夕より即時に、馳付、辻条を助るゝ。あつて、いどの御所を防ぐんと、最前より馳まらるゝ。働さ居らるゝ。処は、胡比奈三郎、強力のおゝ、御家臣、救尋討取、と、敵まる者ありと、告り、一、あつて、我馳向て、戈秀と戦ふべし。一家の軍、恥むるゝ。のゝ、渠が、力、み及ぶらるゝ。されども、難を、あつて、戦はらるゝ。臆病ありて、且、心あ

二似たり我我秀又討まれば城も大丈夫の忠義を顯す處若運く渠を
 討泊が生ての忠臣ありと覚悟とさしめ唯一騎馳出し我秀を尋ねる
 怨み御所の南面めて行遇り重茂声とけ朝比奈三郎と見受け
 しぞ高井三郎重茂らあり従弟殿の振おひ実日未の勇氣と見え
 さま足より我一族又列るといども相傳の主君を襲ひなりこの勿射
 らさま棟梁の計我組ほど君の守兵と成て固る處も楮臣川辺の勇猛
 む摧られ敗軍と嘆しゆへ我親類の身も皆捨かく川辺と勝負と
 決し二心もさ糸願さんとかりて尋需る處も端なく遇とと泊り一
 家の好身を私度敵味方とあるのうへ用捨あるも楮人のさる処いご
 心よく太刀打せんと呼りりいふも秀中て汝元頑まて父が城忠よ
 組せぞ邪路み入て賊臣を助るうへ争り用捨定まらざるも比真の勤

して家名と穢まところると云つ馬を進め鉄棒を打捨太刀をうご
 立向へ重茂云もやかかぶと馳合せあはしく太刀めて渡合夜中あはれも
 御所の焼る炎の光白日のごくみして敵味方の剛臆分明みまかりと
 むれば互に耻をあり秘術と尽し五十余合戦も然とどもいふも勝
 負の色もぞ敵味方の兵共とまて唯酒も酔うがごとく感も堪へて
 見物も高井三郎声とけうくのどく戦ふていつる勝負の果へさしめ
 や組で雌雄と決まへと馬を並んとそれ我秀完尔として流石の和田
 の一族ありと双方うると太刀と捨馬上も無手と組合てあが操合
 ち互に鎧を踏外し兩馬が間も落たりし重茂思ひ下みられ我秀
 難も高井三郎と押へるも重茂刃返さんとりかけとも朝比奈が剛
 カも勤とあつて我秀がのり汝既も運尽て我も組返る然とも今日

三時あまりの戦は救身すけみの敵たけみ出合であひしがども手て立者たちめり更さらりしは汝一人
 戦いくさと五十余よそご合組あひぐみで馬うまより墜おちせしと天晴あまのしん大剛おほごうの拳動こぶしうごとりひつべし當時
 鎌倉かまくらに我われと組馬ぐみうまより隕おちらんりの汝みづかが外あはに有あるぞあまも若者わかものをひき
 と殺ころすに残念ざんねん至極しごくあり一族いぞくの好身このみと思おもひねども其勇敢そのゆうげんの愛あいけは命いのちを
 助けぬまへし後のちに君きみの御用ごようは立て死しよとして引起ひきかえんとしけるも重茂むね茂頭あたまを
 振ふるて大丈夫だいじゆうの士戦場しせんじやうみかたて組伏ぐみふは何面目なにめんめあつらん人ひとみ面おもてを合あはせよや
 我汝われみづかを刎返きりかへし首くびを取とるとかひひしごとむ力足ちからたりごとく斯かくのどし何ぞ怨
 処ところあらん我われ二心ふたこころなき澄しやう拙せつと頭あたまとみは汝みづかが為ために討うちろしそ好このみとまへ早く
 首くびを村むらよ若わか引起ひきかえ直ただに切腹きりはらせよと道みちもん気色けしきあつらん
 我秀われひでのよく感かん入い実まことはかや処ところ最もまり一族いぞくの好身このみあつらん非ぜいく命いのちを
 助たすけしごとむ愁あはれ縁ゆかりあつるをりて此こゝちよ退ひきがし便たりかひらんどもを

箭やとる身の習なるまは望のぞみ任せ我手われてまうけりぬをんと終ついに重茂むね茂が首くびを
 打うち叩たたき命いのちと近ちかき寺てらへ入いりて其首そのくびを厚あつく葬うやうやしめ我秀われひで再び馬うまを跨またぎ
 猶敵中なほたけちゆうへ馳行はしりたり此高井三郎このかいさんじやうの力量りきやう比類ひるいなき若者わかものあつらん馬うまを達たせし
 勇士ゆうしある友朝比奈ともあそひなとく挑合いひまひをを見受みうけの輩たぐひ大おほき感かんせしとや又我秀またわれひで
 と一人ひとりまで八百余人やっぴやくにんの敵たけを破やぶるをりてゆりて力量りきやうを突つき惣門そうもんを破やぶる
 三時さんじが間の戦いくさは敵たけを討うちて救すけをたゞ息いきを継ついでるも其その上うへは又高井
 重茂むね茂の剛敵ごうたけを討うちて万夫まんぷも当あたりぬの勇ゆうと我秀われひであどどひへし然しかも
 情なさけあつらんて款かきとのへども忠孝ちゆうかうの者ものをりて助たするをりて此こゝ次第しだい第五編ごだいへんは讓ゆづる
 爰こゝに筆ふでを閑ひまくと云いふ

星月夜頭晦録四編卷之五大尾

編述

高井蘭山



畫工

有坂蹄齋



一之卷

繡像

朝倉伊八刀

二之卷

原田某刀

三之卷

岡田常吉刀

四之卷

原田某刀

五之卷

朝倉伊八刀

文政五 壬午 晚冬 兌

和漢
西洋

書籍賣捌處

大阪心齋橋博愛町角

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

